

衣服の文化：ファッション図像コレクション

——リッパーハイデ服飾ライブラリー

ベルリン博物館附属美術館図書館シニア・キュレーター アーデルハイト・ラッシュェ

THE CULTURE OF DRESS: SAMMLUNG MODEBILD – LIPPERHEIDISCHE KOSTÜMBIBLIOTHEK

by Adelheid RASCHE, Senior Curator, Kunstbibliothek, Staatliche Museen zu Berlin

The Lipperheidische Kostümbibliothek (Lipperheide Costume Library) at Kunstbibliothek, Staatliche Museen zu Berlin (Art Library, The National Museums in Berlin) originated with the donation of a costume study collection by Franz von Lipperheide in 1899. Today, the library houses 40,000 journals, monographs from the 15th century, and over 100,000 drawings.

The special point of Lipperheide Costume Library is that its collection covers not only documents but also drawings, paintings, and photos concerning garments. The library's collection includes old items like a German manuscript with illustrations made in 1580 containing as many as 150 illustrations of clothes, and the *Lady's Magazine* (1770-1825), as well as a rare edition of *La Guirlande des Mois* (1917-1921) with a cover produced by George Barbier. These materials have been generally open to the public. All visitors to the museum can access the collected materials free of charge.

In addition, as a research institute, the library has held the monthly series of “MODE Thema MODE: Internationale Vorträge zu historischer Kleidung und Mode,” inviting researchers throughout the world to lecture meetings on various themes concerning garments. Moreover, every several years, a large-scale international conference is held. In 2010, the conference was named “Die Räume der Mode.”

Furthermore, special exhibitions are held with the museum's collection or jointly with other museum's collections. The last exhibition “Visions & Fashion: Capturing Style 1980-2010” verified from various angles the relationships between the fashion and the drawings collected in the past 30 years.

Fashion surely draws the attention of German media and young people. The collection of Lipperheide Costume Library and the exhibitions, lecture meetings and books organized by the museum will continue to provide incentives to those devotees.

ベルリンのファッション雑誌で成功した出版社であり、裕福な市民収集家でもあったフランツ・フォン・リッパーハイデは、1899年、寄贈契約を通じて彼の貴重な「服飾学コレクション」を、ベルリンにあった当時の王立博物館に譲渡した。そのとき、衣服とファ

ッションの文化史に関する世界最古の、今日に至るまで最も重要な蔵書と図像コレクションの基礎が築かれた。この「ファッション図像コレクション——リッパ―ハイデ服飾ライブラリー」は、今日ではポツダム広場近くのベルリン博物館の文化フォーラムにある美術図書館の一部となっている。

フランツ・フォン・リッパ―ハイデは、1899年に収集の意図について自ら以下のように述べた。

半世紀以上も前から風俗研究に対する関心は絶えず高まり続け、そしてとりわけこの時代になって初めて真に学問研究の対象となった。[…]

どこでも知ることができないのだとしても、少なくとも専門的研究に基づいて資料から導き出される学識、しかしながら実際的な知識が、他の分野と同じように今日という時代には必要なのだ。

今日的な要求や必要に合わせ、風俗研究という広範な専門領域に必要な資料を用意し、一部の入手困難な資料を大体的に開放したことが、リッパ―ハイデ男爵の服飾学コレクションを組織的に拡充するきっかけとなった。[…] (註1)

このような先験的な収集目的は、もっとも良い意味では、その時代の歴史精神のたまものであり、現在の服飾研究の要件を満たしている。しかしながらそれは、フランツと彼の妻フリーダ・リッパ―ハイデが1877年から1899年の間に計学していた特異な「服飾学コレクション」の根底にあるねらいでもあった。その道に大いに精通していたことと、多額の資金投入のおかげで実現された、広範囲をカバーする図書館は、ダンスや舞台芸術、スポーツや遊戯、祝祭や式典、食文化、旅行やカリカチュアといった服飾研究のあらゆる領域に関する文書資料や雑誌、二次文献から誕生した。図書館の設立に並行して、リッパ―ハイデ夫妻は、先にあげたテーマすべてに関するスケッチや版画、写真から成る図像n画や風俗画の絵画コレクションを服飾史的な観点からまとめ上げた。

フランツ・リッパ―ハイデは寛大な寄贈契約の中で、彼のコレクションが当時のベルリン王立博物館に恒久的に帰属するよう定めた。1899年10月1日に、このコレクションが当時の王立工芸美術館附属図書館（今日の美術図書館）の独立した部門として引き渡された後でも、今ではリッパ―ハイデ服飾ライブラリーと呼ばれているこのコレクションは、創設者の意図に従って別個の図書館として一般に公開されてきた。公共財産になってからこれまでの112年の間に、蔵書と図像コレクションのさらなる増築や拡充が行われ、現在4万冊の雑誌と15世紀から現在までのモノグラフ、そして10万枚をはるかに上回る図版

が所蔵されている。

リッパーハイデ服飾ライブラリーは設立された時からすでに、設立者によって二重の性格が与えられていた。つまり、文書資料と二次文献が他に類を見ないほど充実した国際的な研究図書館であると同時に、貴重な印刷物や図版群、芸術的な素描や版画、写真や服飾史に関連した絵画作品のコレクションを持つ博物館だったのである。フランツ・リッパーハイデは、彼のコレクションがテキスタイルや衣服が集められた工芸美術館とその図書館のすぐ隣に恒久的に設置されたとき、こうした特殊な性格をよく自覚していた。1906年からはリッパーハイデ服飾ライブラリーでは学習室が開放され、すべての利用者が無料で蔵書を読覧できるようになった。このコレクションはいつのころからか、「ファッション図像コレクション——リッパーハイデ服飾ライブラリー」と呼ばれるようになり、その収蔵品からはほぼ毎年特別展が企画され、同時刊行物が発行されている（註2）。

この図書館では、毎年約600冊の国内外の新刊書の購入に加えて、およそ60種類の国際的な雑誌を定期購読している。衣服やファッションに関連した内容のものが集中的に購入されているが、仕事衣や職業服、制服、舞台衣装あるいは映画衣裳といったあらゆるテーマがそこに含まれ、加えて文化史の著作や、旅行、スポーツ、カリカチュアに関する著作も購入図書が選ばれている。歴史的資料のうちでは16世紀の服飾本が際立っており、なかでも、おそらくイタリアのものを手本に制作したであろう150もの衣装の描写が掲載されている1580年のドイツの挿絵写本（Fig.1）があげられる（註3）。他にも、16世紀から18世紀までの旅行書の歴史的蔵書、ヨーロッパの領主の屋敷の祝宴記録、約300冊の携帯用の歴本のコレクションが充実しており、ジョルジュ・バルビエによる装丁が施された『ラ・ギルランド・デ・モア』（1917-1921年）の希少な版も収蔵されている。

「ファッション図像コレクション——リッパーハイデ服飾ライブラリー」が所蔵する雑誌はおよそ20,000冊に上り、あらゆる研究課題にとって重要な資料を提供している。最も古いものが『レディーズ・マガジン』（1770-1825年）、「キャビネ・デ・モード』（1785-1789年）、『ジュルナル・デス・ルクスス・ウント・デア・モーデン』（1786-1827年）といったタイトルに始まっていることからわかるように、19世紀から国際的な雑誌は多様化していく。その多様性は、雑誌データベース（ドイツ語雑誌蔵書中央紹介所 www.zeitschriftendatenbank.de）に登録されている。より新しい雑誌では、ファッションやアクセサリ、舞台芸術、映画やカリカチュアといったテーマに重点が置かれている。『ラ・カリカチュール』（1830-1843年）、『レ・モード』（1901-1920年）、『ディー・ダーメ』（1911-1943年）、『ガゼット・デュ・ボントン』（1912-1925年）、それに1991年

から発行されているニューヨークの雑誌『ヴィジヨネア』の一揃いの雑誌はとりわけ呼び物となっており、よく利用される蔵書である。

図像コレクションは、16世紀から20世紀の版画や芸術家が描いたスケッチ、そして19世紀中頃から現代までの写真を提供している。そのなかでも、舞台芸術や映画衣装の下絵、ファッション・イラスト、ヨーロッパとアジアの民族衣装のスケッチや写真、1920年のダンス写真、そして1900年頃から1980年代のファッション写真にとりわけ焦点が当てられている。服飾ライブラリーは、民族学者であり芸術家であったマックス・ティルケ [1869-1942] の素描全作品 (Fig.2) を、他の遺作と一緒に保管している。彼は数十年にも渡ってあらゆる大陸の衣服の伝統を芸術的な素描によって記録していたのである。

図像コレクションは既に一定の領域群にまとめられ、公開可能である。1945年以前から所有しているすべてのファッション写真は、テーマ別プロジェクトの枠内でデータベース化され在庫目録が作成されており、1600年から1900年のファッションに関するカリキュラはみな当時の情報と一緒に登録されている。また、1920年代のファッションスケッチの原画の所蔵は欠落なく登録管理されている。ファッション都市ベルリンは、印刷物や映画スターを通じて国際的に知れ渡った流行のファッション産業によって、20年代には世界的な中心地と見なされるようになった。コレクションの貴重な原画スケッチの中ではロッテ・ヴェルネキルク (Fig.3) をはじめとした多くのクリエイティブなイラストレーターによるものが代表例としてあげられる。

他には、当館が何年にも渡って収集を続けてきた、フランスの著名な版画家ルネ・グリュオーによる合計54点のここ50年間のファッション・イラスト (Fig.4) や、アントニオ・ロペニやマッツ・グスタフソン、ルーベン・アルテリオ、ロレンツォ・マトッティのスケッチが白眉を飾る。こうした芸術的なファッション写真は数年前からとりわけ重点的に拡充されてきた。ウィリアム・クラインやフランク・ホーヴァット、ソール・ライター、ピーター・リンドバーグといった有名なファッション写真家と並んで、このファッション写真のコレクションを代表するのはとりわけ若い才能である。2007年にマルティンマーゴが制作した「楽園の鳥」のシリーズ (Fig.5) では、ファッションショーの東の間の瞬間が主題とされており、光と戯れながら運動する身体はぼやけて抽象化され、暗示的な幻想空間が生み出されている。

「ファッション図像コレクションリッパーハイデ服飾ライブラリー」は、研究機関と博物館コレクションの両方にまたがる様々な活動に努めている活動的な公共機関である。す

でに 2003 年から文化フォーラムでは「MODE Thema MODE: Internationale Vorträge zu historischer Kleidung und Mode (モード・テーマ・モード：歴史的な衣服とファッションに関する国際講演)」が行われている。月に一度、ドイツやヨーロッパ、また世界中から研究者が招かれて、服飾研究の様々なテーマに関する図説形式講演を行っている。たとえば、ファッションアイコンとしての皇妃シシィ (訳注 1)、バイエルンの 1568 年の婚礼 (訳注 2)、国際的なファッション展とその受容、シャネルとディオールの今日のデザイン戦略、婦人帽としてのシルクハットといったテーマで講演が行われた。これまでに約 70 回の講演会が催され、来場者からは大変な好評を博した。

「ファッション図像コレクション——リッパーハイデ服飾ライブラリー」では、もっと長い間隔をおいてではあるが、専門家たちによる国際会議も催されてきた。たとえば 2004 年には「Garçonne & Cie in Paris und Berlin : Mode im intermedialen Kontext der 20er Jahr (ベルリンとパリにおけるギャルソンヌとその周辺:20 年代のメディア間的文脈におけるファッション)」や、2010 年には「Die Räume der Mode (モードの空間)」と題された大会が、ベルリンの大学や研究機関と共同で行われた。

このコレクションの所蔵品や、個人の所有品、あるいは他の博物館のコレクションの貸し出しから、ほぼ毎年特別展が企画される。2003 年に行われた展覧会「Ridikül! Mode in der Karikatur (滑稽な！カリカチュアにおけるファッション)」は、近代ヨーロッパにおけるファッションのカリカチュアに関する世界初の大規模な紹介であった。所蔵する約 800 枚の中から、ドイツ、フランス、イギリスの 180 点の版画が選び出され、その元となった衣服とともに、テーマ別に展示された (註 4)。

2006 年には、展覧会「Coats! MaxMara, 55 Years of Italian Fashion (コート！マックスマラー：イタリアのファッションの 55 年)」が、ベルリンに続いて東京、北京、モスクワで催された (註 5)。1951 年にレージョ・エミリアで設立されたマックスマラーは、その質の高さとデザイン性を強みとする、最も名の知れた最古のイタリアのファッション会社の一つである。この展覧会では、カール・ラガーフェルド、ジャン＝シャルル・ド・カステルバジャック、ルチアーノ・ソプラニ、ギー・ポラン、アンヌ＝マリー・ベレッタやその他のデザイナーのスケッチに基づいた約 70 点のオリジナル作が展示され、美術史的な大きな流れが示された。筆者によってマックスマラー社のアーカイブから全部で 15,000 点の収蔵品が選び出され、展覧会全体が構成された。ロラン・バルトが定式化し定義したような、「モードの体系」という包括的な概念に則った内容と空間に関するコンセプトによって、マックスマラーと共同で新しい展覧会形式が作り出された。そこではファッション

は、クリエイティブなデザインの機能、流行の導入、戦略的なコレクション計画、加工方法や進歩的な製造法、マーケティング戦略やコミュニケーション戦略といったいくつかの重要な制作過程から成る重層的な体系として提示された。

他には、2007年にベルリンとケルンで催された展覧会「Christian Dior und Deutschland, 1947 bis 1957 (クリスチャン・ディオールとドイツ：1947年から1957年まで)」の系統的なアプローチがあげられる(註6)、ここでは、ドイツを中心としたニュールックの受容の在り方が表されているばかりか、パリの有名なファッション企業のドイツに対する経済関係や貿易関係に関する調査が初めて行われて発表された。ドイツの博物館のコレクションの中から約20点のディオールオリジナルのオートクチュールが展示され、1955年から主にドイツで製造されたコスチューム・ジュエリーのセクションスローカルで生産されたストッキングやバッグのセクション、また、ドイツのモード雑誌や週間ニュース映画におけるメディアの反応に関するセクションが設けられた。

最新の展覧会「Visions & Fashion: Capturing Style 1980-2010 (ヴィジョンとファッション：スタイルの記録 1980-2010)」では、過去30年間の図像とファッションとの多面的な関係性に焦点が当てられた(註7)。フリーランスの芸術家や写真家、イラストレーターによる約40の作品群は、それ自体がオリジナル作品として提示される。出品されたものの大部分が「ファッション図像コレクション——リップパーハイデ服飾ライブラリー」の所蔵品(購入品や寄贈品)であり、雑誌やルックブック、ファッション・ブランドの広告やコマーシャル・フィルムがそこに含まれる。

手短に述べるならば、「ファッション図像コレクション——リップパーハイデ服飾ライブラリー」の活動は、より大きな文脈の中で活発になってきていると考えられる。ベルリンのファッション・シーンは数年前から国際的な成功を収めて飛躍を遂げ、新たに名声を博し、メディアでも大きな注目を浴びるようになった。ララ・ベルリン、ミハヤルスキー、ツェー・ネオン、ミハヤエル・ソントグ、フランク・リーダーのようなベルリンのデザイナーが国内外で話題に上っている。「プレミアム」や「ブレッド&バター」のようなファッション・フェアや、メルセデス・ベンツ・ファッション・ウィークでは、活気に満ちたシーンが繰り広げられた。ベルリンの大学8校でファッション・デザイナーが養成されているために、服飾ライブラリーへの来館者数も明らかに増加している。ファッションというテーマは、ドイツのメディアや若い人々の中に確かに存在しており、「ファッション図像コレクション——リップパーハイデ服飾ライブラリー」が国際的に有名な研究機関・博物館としてそのために貢献できるのは喜ばしいばかりである。ファッションの歴史を時代のデザインの

基盤として知らしめ、有効活用することができた時、わたしたちの任務が果たされる。わたしたちの課題は、現存する歴史的資料を興味深く、目に見えるようにすることである。学習者やデザイナー、そして服飾研究者のために、わたしたちはこの豊富なコレクション資料への案内役となり続けるつもりである。わたしたちが企画する展覧会や講演や書物は、進展し続ける研究に刺激を与え、示唆に満ちた豊富な資料を提供しているはずだ。

(翻訳：京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程 古川真宏)

<註>

- 註1. Einleitung zume *Katalog der Freiherrlich von Lipperheide'schen Kostümbibliothek*, Berlin, 1896-1901, Bd. 1, S. 1-7, hier S. 3. 「風俗研究 Trachtenkunde」という概念は、今日では「服飾研究 Kleidunfsforschung」に最も近い。
- 註2. 1999年以前の展覧会一覧は以下に収録。Adelheide Rasche (Hg.), *Die Kultur der Kleider, zum bundert hundertjährigen Bestehen der Lipperheideschen Kostümbibliothek*, Berlin 1999, S.132-135. それ以降の展覧会は以下の通り。
- 2003年 *Ridikül! Mode in der Karikatur, 1600 bis 1900* (滑稽な! : カリカチュアにおけるファッション 1600-1900年)
- 2005年 *Berliner Modefotografie – die Dreißiger Jahre* (30年代のベルリンのファッション写真)
- 2006年 *Coats! Max Mara, 55 Jahre Mode aus Italien* (コート! マックスマラ: イタリアのファッション 55年)
- 2007年 *Christian Dior und Deutschland, 1947 bis 1957* (クリスチャン・ディオールとドイツ: 1947年から1957年まで)
- 2009年 *Pailletten – Posen – Puderdosen. Modezeichnungen und Objekte der Zwanziger Jahre* (スパンコール・ポーズ・コンパクト: 20年代のファッションスケッチとグッズ)
- 2010年 *High Sixties Fashion, Modefotografie und -illustration* (ハイ・シックスティーズのファッション: ファッション写真とイラストレーション)
- 2011年 *Visions & Fashion, Bilder der Mode 1980-2010* (ヴィジョンとファッション: ファッションの図像 1980-2010年)
- 註3. Adelheid Rasche: "Die Bilderhandschrift Lipp-OZ 2 von 1580, ein Trachtenbuch aus dem Fugger-Umkreis," In: A. Rasche (Hg.) op. cit., S. 23-35.
- 註4. A. Rasche u. G. Wolter (Hg.): *Ridikül! Mode in der Karikatur, 1600 bis 1900*. Berlin / Köln, 2003.
- 註5. A. Rasche: *Coats! Max Mara, 55 Years of Italian Fashion*. Milan 2006 (English Edition).
- 註6. A. Rasche (Hg.): *Christian Dior and Germany, 1947 to 1957*. Stuttgart 2007 (English Edition).
- 註7. A. Rasche u. J. May (Hg.): *Visions & Fashion, Capturing Style 1980-2010*. Bielefeld 2011 (Bilingual German / English Edition).

<訳註>

- 訳注1. オーストリア=ハンガリー二重帝国の皇帝(兼国王) フランツ・ヨーゼフ1世の工合であるエリーザベトとシシイの愛称で呼ばれていた。
- 訳注2. 1568年のバイエルン公ヴィルヘルム5世とレナータ・ロートリンゲンの結婚の際には盛大な祝典が催された。

<図版>

Fig. 1 ヴェネチアの婚礼衣装 1581年頃
Unknown Artist, Bride Costume from Venice, watercolour, c.1581.

Fig. 2 マックス・ティルケ タシュケント（トルキスタン）のコート「シャラト」 水彩 1921年

Max Tilke, Coat "Chalat" from Tashkent, Turkistan, watercolour, 1921.

Fig.3 ロッテ・ヴェルネキンク ファッション・イラスト インク 1928年

Lotte Wernekink, Fashion Illustration, ink, 1928.

Fig. 4 ルネ・グリュオー 《ヒッツ・イン・ニッツ》 水彩、インク 『International Textiles』表紙イラスト 1969年

René Gruau, *Hits in Knits*, watercolour and ink, cover illustration for *International Textiles*, 1969.

Fig. 5 マルティン・マーゴ 《バーズ・オブ・パラダイス V》 デジタル写真 2007年

Martin Mago, *Birds of Paradise V*, digital photography, 2007.

アーデルハイト・ラッシュェ (Adelheid Rasche)

1963年、ザルツブルク生まれ。ベルリン博物館付属美術図書館シニア・キュレーター。美術史、ロマンス語学、フランス音楽史、哲学のPh.D取得。90年よりリッパーハイデ服飾ライブラリーの部門長、2005年より現職。2007年よりメルセデス・ベンツ・ファッション・ウィーク（ベルリン）の審査員。

（※肩書は掲載時のものです）